

逆接の予測 ——予測の読みの一側面——

石黒 圭

【キーワード】 予測 逆接 譲歩 対比 反対

1 本稿の目的

日常の会話をしている中で、「確かに君の言うことは正しいとは思うよ」と言われたら、言われた側はその後に「でも」や「けど」が来ることを予想して身構えるだろう。また、あることをめぐって二人で口論しているような場面で、「あなたは自分に自信があるからそんなことが言えるのよ」と言われたら、言われた側は「でも私には自信がないからそんなこと言えるはずがないじゃない」という相手の含意を汲み取るだろうし、実際に相手が続けてそれに類する内容の発話をするケースも少なくないだろう。さらに友だちに「段ボールを切りたいんだけど、はさみある？」と尋ねて「あるにはあるよ」と答えられたとき、尋ねた側が「じゃあ、貸して」と素直に返事をしにくくなる背景には、「あるにはあるよ」の後に「でもさびびってあまりよく切れないよ」や「だけど小さくて段ボールを切るのには使いにくよ」という相手の発話が来ることが予想されるからである。

今挙げた三つの用例「確かに君の言うことは正しいとは思うよ」「あなたは自分に自信があるからそんなことが言えるのよ」「あるにはあるよ」を後続文との関係から順に譲歩^(註1)・対比^(註2)・反対^(註3)と呼んでおくが、これら三つの発話に共通しているのは、いずれもその発話の後に逆接の内容が予測される点である。本稿では書きことばを資料^(註4)に、逆接を予測するメカニズムを探りたい。

逆接は、「しかし」などの接続語が順接の接続語に比べて省略しにくいことからわかるように、本来違和感の大きい接続の仕方であるが、その違和感を和らげるように、次に来るものが逆接であることを表す伏線が張ってあることが多い。逆接を表すそうした伏線を、読み手がどのような意味的特徴と形態的指標を手がかりに認識しているか、それを明らかにすることを本稿の目的とする。ふだん読み手が意識せずに読み取っている、逆接を予測させる意味的特徴と、それを支える形態的指標を意識化できれば、文章理解の精度も上がるであろうし、国語教育や日本語教育の読解指導にもそれを応用することが可能になるであろう。

2 調査の方法

本稿は石黒(1996)を下地にしている。石黒(1996)は連文論の観点から予測

を考えたもので、その予測は文を単位としている。調査手順は以下の通りである。

- ① 冒頭の1文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ② 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときはそれを記録する。
- ↓
- ①' 冒頭の1文(=先行文)の内容は既に頭に入っている。
- ②' 冒頭文の次の文(=当該文)を読み、隠してある後続文を予測する。
- ③' 隠してあった後続文を読み、予測が当たっていたときはそれを記録する。

以下この作業を文章が終わるまで繰り返す。ちなみにここでいう当該文とは今読んで問題にしている文のこと、先行文とは当該文より前にある文のこと、後続文とは当該文より後にある文のことである。調査に際しては、文章の内容だけを問題とし、題名や書き手、媒体やジャンル、読み手の背景知識といった予測に絡む周辺の要素(石黒 1997)までは問題にしないものとする。本稿では、こうした作業を通して得られた用例のうち、逆接のものについて詳細に論じることにする。

なお、3の「調査の結果」にでてくる用例の提示の仕方について予め説明しておく。当該文には下線を付し(特に予測を生み出す要素には二重下線を付すことがある)、その当該文を理解した結果、予測できた後続文には破線を付すことにする。予測には、当該文だけでなく、当該文までの文脈も影響を与えているので、そのような文脈を示す必要がある場合、当該文の直前の先行文を何文か明示するか、先行文が長い場合はそれまでの文脈を要約して { } に入れて提示する。

3 調査の結果

1章で述べたように逆接は譲歩・対比・反対の三つに分かれる。しかし正確には、対比と反対は対立的な概念であるが、譲歩はその二つとは対立してはいるないので、譲歩と対比、譲歩と反対が同時に成立することがあり得る。その事実を鑑みて、まず譲歩を軸に分類し、その後、対比と反対とに分類する。詳しくは結論に譲るが、おおよその見取り図を前もって示しておく以下ようになる。

譲歩性無：3-1~3-7

譲歩性有一自らの立場の否定的承認^(注5)：3-8~3-10

譲歩性有一相容れない立場の肯定的承認^(注5)：3-11~3-13

対比—対立的対比^(注6)：3-1~3-6、3-8~3-9、3-11

対比—共存的对比^(注6)：3-12

反対：3-7、3-10、3-13

3-1 対立する主題を想起させる主題

係助詞ハを伴う格成分が、対になる別の格成分を想定できるときに生じる予測である。

3-1-1 ある主体—別の主体

- (1) {整子も重乃も被爆体験があり、そのせいで流産したり生まれてきた子が育たなかったりしているという文脈で} 枕元の箱から綿をとって整子が土間におりたあと、うちはあきらめとるが親雄のところはどうするつもりじゃろうかね、親一人子一人の親雄に子供が生まれんとこりゃあ困ることになるぞと、いつか良人の十郎がいったことを重乃は脳裏に浮かべた。子が育たんのは淋しいがおれは兄弟も多いし、あきらめればそれでことがすむ。しかし親雄のところはそうはいかんぞ。 (何 191p)

係助詞ハで表される主題に、主体、つまりヒトまたはそれに準ずるものがくる場合である。主体が主題にくるので、述語には意志動詞や他動詞、特に思考動詞が目立つ。形態上の特徴としては係助詞ハを伴い、主体を表す名詞は「あなた—私」「大人—子ども」「ある人々—別の人々」のように対になる相手が想定できるものがくる。文脈の助けさえ借りれば、「アメリカ人—日本人」「文部省—外務省」のように対をなすものの候補が多いものでも、特定することが可能になる。

3-1-2 ある対象—別の対象

- (2) 国庫負担率の大きいグループは、空港、住宅、国土保全、道路、港湾などである。一方、それが小さいグループは環境衛生、文教施設、都市計画、厚生福祉であり、両グループの間には相当な落差がある。 (世 925p)

係助詞ハで表される主題に、対象、つまりモノやコトがくる場合も、対比を引き起こすことがある。述語には特に決まった形のくる傾向はないが、形態上の特徴として、係助詞ハを伴い、対象を表す名詞は「前者—後者」「右側—左側」のように対になるものが即座に思い浮かぶものがくる。主体の場合同様、文脈による支えがあれば、「自然科学—社会科学」「貨物輸送量—旅客輸送量」のようなものまで、対をなすものを探し当てるのが可能になる。また、対象の場合、主格以外の格が主題化していることが多いが、一般に主格以外の格が主題化した方が一般に予測は成立しやすい。(3)はヲ格の例である。

- (3) 人類においてただひとりの核の被爆者である日本は広島と長崎をオラドゥルとして保存する機会は逸しました。しかし、まだ保存の手段は残されています。核実験をおこなう大国や、核武装に接近する国々にむかって、それは平和にそむいて平和から遠ざかる致命的な道だとうまずたゆまず直言することです。{オラドゥルとは、ナチスの大虐殺を受けたその当時の姿を人類の負の遺産として今も保存し続けるフランスの村のこと}(世 847p)

3-2 対立する状況を想起させる状況

時や場所、それに類する状況成分が、対になる別の状況成分を想起させるとき生じる予測である。

3-2-1 ある時—別の時

- (4) そしてこれまでは、地域民主主義は、それを支えるひろい文化変容の問題

としてもとらえられてきましたが、どちらかといえば、それはより政治的な改革や行動様式にかかわるものとして考えられる傾向がありました。

これに対し、新しい「地方の時代」においては、「地域」は、経済的、社会的、生活的に、より多くのまとまりと実体をもったものとして、いわば地域民主主義に肉体を付与するものとして、考えられるようになったとすべきでしょう。 (世 801p)

一般に状況語は主体や対象よりも対比を生み出しやすい。述語に対する必須性が弱いので、わざわざ表出すること自体、何らかの表現効果を狙っていると考えられるからである。特に時の場合は、形態上、トキを表す名詞、係助詞ハに加えて、助動詞タを伴うことが多いため、予測は容易である。

3-2-2 ある場所一別の場所

- (5) 〔日本とアメリカの経済学を対照するという文脈で〕経済学の「制度化」されていない国、日本では、ひとことにエコノミストといっても、背景となる専門教育もまちまちだし、そのうえ、信奉する「理論」も一枚岩的でない。新古典派の経済理論を是とする人もおれば、「理論」そのものを頭から排斥する、高名なエコノミストもいる。アメリカの場合、新古典派とシカゴ学派という二つの流派にわかれるが、用いる語いと文法は、ほぼ共通している。そのため、両学派の違いをもたらす要点が何であるかを、言葉で明晰に述べることができる。 (世 820p)

場所も対比を生みやすい。形態としてはトコロを表す名詞、係助詞ハに表れる。

3-3 対立する側面を想起させる側面

3-1の「主題」や3-2の「状況」のときとは違って、対になるようなある特定の成分が存在することよって対比が生まれるわけではなく、一文全体を対比の単位として、ある側面と別の側面という対比を生み出す。

3-3-0 ある側面一別の側面

- (6) 公共事業としておこなわれる自動車道路の建設は一方では、土木建設産業に対して効果的な有効需要を生み出し、高い利潤を確保するという役割を果たす。他方では、政治的フェイバリズムを巧みに利用して、自民党専制体制を維持するという役割を果たしてきた。 (世 974p)

言語形態に現れるものは、調査資料内では「一方—他方」というものしかなかった。それ以外のものは(7)のように文脈の支えによらなければ予測不可能である。

- (7) 内村に対する評価が分かれるのは、彼の思想や行動の中にしばしば矛盾が存在したからである。たとえば、彼の年若い友人で同じ『萬朝報』で働いていた山県五十雄が、日露開戦という段階で、開戦論に賛成した時、内村は憤然テーブルを叩いて「君までが」と一喝した。「ブルーナス、お前もか!」というわけである。ところがその内村は、旅順沖の海戦で日本艦隊

が大勝利を得たと聞くと、「四隣へ鳴り響く程声高く万歳を三唱した」と、
当の山県に手紙を書いているのである。(世 866p)

当該文だけでは対比は予測できない。先行文の「しばしば矛盾が存在した」という文脈に支えられてこそ、対比の予測が成り立つのである。

3-4 対立する現実事象を想起させる仮想事象

事実と反する仮想と、実際に存在する現実という対で生じる対比である。

3-4-1 本来一現実

- (8) 生きのこりの人数は知れたものであったから、一千戸あればみんなはいれ
そうなものだった。しかし引揚者と復員者が殺到してき、全市の家をうし
なっているため、罹災者住宅はまたたく間に満員になった。(何 110p)

本来そうあるはずだ、理想としてはそうあるべきだ、しかし現実にはそうはな
っていない、という対である。文末表現「はずだ」「べきだ」「ねばならない」
「になっている」「とされている」「そうなものだ」などを中心として、これら
文末表現が助動詞タを伴ったり、さらには「本来」「もともと」などが加わった
りすることで予測が強化されることになる。

3-4-2 意志一現実

- (9) Yさんの店は繁華な場所にあるだけに、家の周囲はすぐ隣りや裏側の家に
密接していて少しの余裕もない。この家には風呂湯がなかった。私はそれ
を承知していて、街中の銭湯にゆくつもりでいた。

Kさんが二階の窓からつづいた物干台で、カタカタと金づちを打ち、す
だれを張りめぐらしている。この物干台に私の行水の間を急ごしらえて
いるのだという。(何 217p)

皮肉な言い方だが、意志は貫徹されず、期待は裏切られ、願いはかなわず、予
定はつぶれてしまうものである。文末表現「つもりだ」「ようとする」「たい」
「と期待する」「と願う」「予定だ」「と計画する」などは、特に助動詞タを伴
うことで、その実現したい内容が実現しないという予測を生じさせる傾向がある。

3-4-3 推量一現実

- (10) 男を背後から抱き上げた。

「あなたが死ぬるなんて、まったく意外でしたよ」

彼は、子供がむずかるように腰を低く落とし、両足で踏ん張りながら抵抗
を始めたように思われた。だが、男は、首筋の傷の痛みにも表情を変えるこ
とはなかった。(何 175p)

傍目からの推測、当て推量、将来の予想などは往々にして外れるものである。
文末表現「だろう／のではないかと思う」「(かの)ように思う／見える／聞こ
える」などは、特に助動詞タを伴うことで、その推量が実現しないことを予想さ
せる。「一見」「表面上は」という注釈表現がそうした予測に効くこともある。

また「だろう」「かもしれない」「にちがいない」など反実仮想性が強くないように思われる文末表現も、(11)のように、接続助詞「れば」「なら」「たら」で代表される条件句とともに用いられることで、こうした予測を起こすようになる。

(11) その人との距離から言えば、もし大きな声で呼べば、必ず私の方を振り返って見たにちがいなかった。

だが、声を出すのを、一瞬躊躇したそのわずかなあいだに、その人は小走りにテントの前の人だけのなかに、はいっていった。 (何 295p)

このような例は次の「対立する条件を想起させる条件」へとつながっていく。

3-5 対立する条件を想起させる条件

ある条件が満たされれば事態が生起するが、その条件が満たされなければ事態は生起しないという対から生まれる対比である。

3-5-0 ある条件一別の条件

(12) 昇は、自分の勤めている大学の研究室のことを、阿紀がたずねれば委しく答えてくれた。けれど、自分から口を開くことはまずなかった。 (何 230p)

このような条件対比を支えるのは、形態的には「れば」「なら」「たら」「と」といった接続助詞であり、この順で対比性が強く出る。

3-6 対立する特殊事象を想起させる一般事象

普通はそうなる、とわざわざ表現するということは、特別な場合はそうはならない、それとは違ったようになることを暗示していて、それが予測につながる。

3-6-0 一般—特殊

(13) 私がこれをたまたま辞書で見て面白いと思ったのは、最初言葉について用いられる語だったカドーという語が、やがて「贈物」を意味するようになったことである。われわれが贈り物というとき、たいていは物を贈ることを意味する。物に託して自分の気持ちを贈るのではあるが、相手に渡されるのは大体物であるのが普通である。ところがフランス語の贈物という言葉の中には、もと、人を喜ばせ面白がらせる言葉という意味があった。人を喜ばせるために言葉を贈物にするという思想があった。 (世 782p)

「普通」「たいてい」「一般的に」「いつも」「常識で」という一般性を表す表現は、特に係助詞への力を借りることによって、それとは対比的な内容を持つ、一般的でない特別な場合を予測させる。

3-7 逆の結果を踏まえた前提

本来の因果関係で考えられる結果とは逆の内容の結果がくることを予測させるものである。当該文の結果と逆の内容がなぜ予測できるかという点、そのような逆の結果に類する内容が当該文の直前の先行文中に存在しているからである。

3-7-0 ある前提—それに矛盾する結果

(14) このことを多少飛躍して言いかえれば、日本において経済学は、一人前の「制度化された科学」として、社会的に認知されるまでには至っていない、ということになる。

ほとんどの総合大学に、経済学部が設けられており、経済学士の数はきわめて多い。にもかかわらず、経済学の何たるかについて、世間一般の人びとのいづくイメージは、どうもはっきりと定まらないようである。

(世 813p)

(14)の下線部だけなら「日本において経済学は社会的によく理解され広く受け入れられている」ことになりそうなものである。当該文の直前にある、当該文とは直接の接続関係にはない先行文の存在が逆接の予測に大きく関与している。

3-8 行き過ぎの否定

自らの意見の行き過ぎを否定し譲歩することで、かえって自らの意見の部分的妥当性を予測させるものである。

3-8-1 全面性の否定—一部分性の肯定

(15) もちろん私は、コミュニケーションの理論やその広範な応用について頭から反対するわけではない。ただ、人間は「コミュニケーション」を拒否することにおいて人間そのものである場合もある、という事実に関心を寄せずにはいられないだけである。 (世 789p)

「全部」「全く」「完全に」「必ずしも」といった陳述副詞的表現が否定語ナイまたはそれに準ずる否定的文末表現と呼応し、さらに係助詞ハが加わることによって全面性の否定が生まれる。(15)の例でいえば、「コミュニケーションの理論やその広範な応用について」反対する立場にある書き手が「頭から反対する」という自らの意見の全面性を「わけではない」と否定し譲歩することで、結果的に自らの意見の正当性を部分的に肯定する方向に読み手を導くことになる^(注7)。

3-8-2 過度の否定—一部分性の肯定

(16) {文部省はいますぐ廃止できぬとしても、徹底的に組織を簡素化すべきであるという文脈の中で} 東京の虎ノ門・霞ヶ関あたりの中央官庁は近年つぎつぎに改築されている。建物が新しくなったからといって、すぐに仕事も新鮮なものに変わるということはない。なかには威圧的なものもあって、改築のすべてが成功しているとは、とてもいえない。しかし文部省の建物は、あの界限でもっとも古いのではないか。その古さは、教育・文化の古さを反映しているように見えてならない。そこで、この古い建物をとりこわし、敷地の半分をこざっぱりとした小公園につくりかえ、残り半分に、簡素化した新しい役所である学芸省のしやれた建物をつくるよう、提案する。 (世 912p)

「容易に」「すぐに」「数回の議論で」「これほど」「そこまで」などの簡単・過度であることを表す表現も、否定語と呼応して、時には係助詞ハを伴ったりして、「全面性の否定」を表す表現と同じような振る舞いをする。

3-9 判断の留保

理解や判断が不可能であると一旦は留保したことが譲歩になって、その留保を踏まえた上での理解や判断を予測させるものである。

3-9-0 判断の留保—条件付き判断

- (17) こうしてアメリカでは、ほとんどすべての人文社会科学は、数量化という手続きによって、一人前の科学として、社会的に容認されるようになる。しかし、その代償として、社会諸科学から、思想的な側面や文化的な背景を、いつのまにか「脱色」してしまったことも、否定しがたい事実である。
計算機で処理されるような社会科学がいいのか、それとも思想的な色彩の濃い社会科学がいいのか、一概に言い切ることはできない。〔中略〕
しかし、その半面、{思想的な色彩の濃い社会科学は}「科学」の枠組みにしばられない、自由で闊達な発想を生む、という長所につながることも、見落としてはならない。。(世 823p)

「わからない」「判断できない」といった理解や判断を留保するような意味を持つ文末表現は、実はその後で、書き手のわかる範囲での理解や、条件付きの判断がなされることが多い。そうした予測を誘発する背景には、書き手がひとつの立場に立脚して文章を書き、自説を展開している以上、理解や判断ができないという表現は、譲歩でない限りほとんど意味を持ち得ないということがある。

3-10 逆の結果を踏まえた上での前提の限定

先行文によって形成される文脈の力で、限定的な意味を持つ当該文がその限定性の故に譲歩化し、本来発展していく方向と逆の方向に予測が向かうものである。

3-10-0 前提の限定—結果への発展の肯定

- (18) これまでは、派閥連合という大枠はあらかじめ存在していた。新首相は、派閥間の新しい力関係に応じて役職を配分すれば内閣を形成することができた。しかも連合の枠そのものが大きかったから、一つの派閥が落ちこぼれても、組閣に差支えたりはしなかった。

しかし、今回は違う。前回とも違う。石川真澄氏（「燃えるに燃えられぬ自民の抗争」『朝日ジャーナル』一〇月二六日号）の計算によると、保守系無所属の当選後入党者までを含めて自民党の議席は前회가二六〇、今回は二五八と予想されていて、二議席の差でしかない。しかし特別国会の首班氏名において、自民党の首相候補者に投票すると予想される総保守（ここにはロッキード被告団や新自クも入っている）と純野党の議席差は

前回では五三、今回は二一に縮まっている。新自クが野党に廻るならば、さらに縮小して一三となる。 (世 833p)

書き手がそれまでの文脈に反して自分の意見を限定的かつ否定的に述べた場合、その結果が逆に肯定的に発展することがある。「まだ」「わずか」などの注釈表現、「にすぎない」「～は…ない」(例えば「したくはない」)などの文末表現によってこの予測は支えられる。(18)の「二議席の差でしかない」は「しかない」という限定が加わったことで「今回は前回とたいして変わらない」という結果になるはずである。しかしそれまでの文脈のせいでその限定が譲歩として働き、その限定がかえって逆の「今回は前回とは大きく違う」という結果を導いている。

3-1-1 部分性の肯定

書き手自身とは相容れない意見を部分的に肯定することで、部分的肯定の残りの大半は、そのような相容れない意見が妥当しないことを予測させるものである。

3-1-1-0 部分性の肯定—全面性の否定

(19) もちろん内村は、一部の人たちの間ではきわめて鮮明なイメージをもって記憶され、生き続けていた。だが、社会的に云えば、内村は一介のキリスト教の伝道者、思想家として、社会の片隅に生きたのであり、一九三〇年に永眠して以後は、ほとんど忘れられた存在であった。 (世 865p)

「一部の人たちの間では」記憶され、生き続けていたということは、裏を返せば「残りの大半の人たちの間では」忘れられていたということである。典型的には「一部」「部分」といった表現に係助詞ハが伴って予測に働く。

3-1-2 反対意見の累加的承認

書き手が自分の意見とは相容れないある事態の成立を容認することで譲歩を生み出し、同時に自分の意見に合う別の事態の成立をも予測するものである。言ってみれば「Aもそうだが、Bもそうだ」という論理であり、一般にAよりもBの方が重大な事態なのである。

3-1-2-1 ある候補の承認—別の候補による反論

(20) 日本の経済学がアメリカの経済学に比べて理解しづらく見えるのは、アメリカの日常生活感覚が経済学と直結しているのに対し、日本ではそれが経済学とかけ離れているからであるという文脈で) 日本の経済学者の姿勢にも、いくらか責任のあることは、私も、認めるにやぶさかでない。しかし、ことがらの本質は、むしろ、いれものとしての社会の側にあるのではなからうか。 (世 816p)

経済学者である書き手は当該文で「日本の経済学者の姿勢にも、いくらか責任のある」と認めておいて譲歩を醸し出し、後続文で自らの主張である「経済学が日本社会で受け入れられないのは社会の側に問題がある」へと内容を導こうとす

る。この予測では典型的に譲歩を表す要素^(註7)の他に、係助詞モが力を発揮する。

3-1 2-2 反対意見の存在の承認—反論

- (21) {ドイツと異なり、過去の戦争責任に対する道義的義務を果たしていない日本の再軍備・海外派兵は許されないという書き手の主張の中で} プラグマティストを自任する日本国民のなかからは、「過去のことにこだわらなくとも、過去をくり返さなければいいではないか。十分に民主主義化した戦後日本で、過去のあやまちをくり返す心配はない」という声が出るかもしれない。そう言うひとたちには、こう問い直すことがどうしても必要だろう。——「あなたが尊敬するあの昭和天皇ですらおしとどめられなかったことを、いま、私たちが目の前にしている政治家たちが止められるだろうか。」 (世 987p)

これは「ある候補の承認—別の候補による反論」よりも譲歩する度合いの小さいもので、相容れない意見を肯定的に承認するところまでもいかず、その存在のみを承認するものである。「そういう意見があることは認める」のである。したがって係助詞モをとることはあまりなく、むしろ「ある」「いる」「多い」など存在を表す述語と文脈との組み合わせで予測が可能になる。

3-1 3 発展性のない前提の肯定

前提は肯定しながらも、その前提から当然導かれるべき結果に発展するのを否定することを予測させるものである。

3-1 3-1 前提の肯定—結果への発展の否定

- (22) {被爆して動けなくなっている女達が、歩いている私に声をかけたという文脈で} が、その女達は、私の立留まったのを見ると、
「あの樹のところにある蒲団は私のですからここへ持って来て下さいませんか」と哀願するのであった。
見ると、樹のところには、なるほど蒲団らしいものはあった。だが、その上にはやはり瀕死の重傷者が臥していて、既にどうにもならないのであった。 (何 26p)

蒲団を持って来るように頼まれてその蒲団が見つかったのだからそれを運んで行ってあげるという結果が来そうなものであるが、現実には運ばなかったという結果を予想してしまう。それは係助詞ハの力によるところが大きい。この(22)の例からわかるように、係助詞ハがこの予測での有力な手がかりになりやすい。

3-1 3-2 前提の肯定—論理的帰結への展開の否定

- (23) 経済学の「危機」や「混迷」をめぐる議論は、わが国の論壇において、ようやく下火となりはじめた。たしかに、論点はほとんど出つくした。にもかかわらず、いかにして危機をのりこえるかについて、目を見張るような方策は、いまのところ、まだ提案されていない。 (世 823p)

議論が下火になり、論点がほとんど出つくしたのだから、後は解決するだけと考えるのが普通の論理であろう。ところが実際は解決していないのである。このような予測が成立するのは係助詞ハがあるためである。その意味でも「前提の肯定—結果への発展の否定」とかなり似ているが、文脈の支えをあまり必要としないことと「だからといって」で常に結ばれ得る論理中心性を考慮し別立てとした。

4 結論

本稿では、調査資料に出現した全用例^(註4)を帰納的に検討した結果、逆接を予想させる当該文の意味的特徴には以下のタイプが存在することを主張する。また、()内に代表的な形態的特徴をあわせて示しておく。また()内に示さなかったが、対立的対比や反対においては係助詞ハが、譲歩においては承認を表す副詞モチロン等、承認を表す動詞ワカル等、承認を表す助動詞カモシレナイ等が、逆接の予測全体にわたって働く形態的指標として存在する^(註7)。

ただし、形態的指標は、意味的特徴とそれを生み出す文脈の支えがあつてこそ予測の力を発揮するものであり、特に譲歩と反対においてその傾向が顕著である。

① 譲歩性を帯びていない対立的対比

- ・対立する主題を想起させる主題（対になる名詞）
- ・対立する状況を想起させる状況（トキ・トコロを表す名詞、助動詞タ）
- ・対立する側面を想起させる側面（側面を表す副詞イッポウ等）
- ・対立する現実事象を想起させる仮想事象（本来・意志・推量を表す文末表現ハズダ・ツモリダ・ヨウニ思ワレル等+助動詞タ、あるべき姿や表層を表す副詞ホンライ・イッケン等、接続助詞レバ等）
- ・対立する条件を想起させる条件（接続助詞レバ等）
- ・対立する特殊事象を想起させる一般事象（一般性を表す副詞フツウ等）

② 譲歩性を帯びていない反対

- ・逆の結果を踏まえた前提

③ 譲歩性を帯びている、自らの立場を否定的に承認する対立的対比

- ・行き過ぎの否定（部分否定表現カナラズシモ〜ナイ等）
- ・判断の留保（判断できないことを示す文末表現ワカラナイ等）

④ 譲歩性を帯びている、自らの立場を否定的に承認する反対

- ・逆の結果を踏まえた上での前提の限定（限定的否定的表現シカナイ等）

⑤ 譲歩性を帯びている、相容れない立場を肯定的に承認する対立的対比

- ・部分性の肯定（部分を表す名詞イチブ等）

⑥ 譲歩性を帯びている、相容れない立場を肯定的に承認する共存的対比

- ・反対意見の累加的承認（係助詞モ、存在を表す動詞アル等）

⑦ 譲歩性を帯びている、相容れない立場を肯定的に承認する反対

- ・発展性のない前提の肯定

注

- 1 前件で自説と対立する意見の認められる部分は認めておいて、後件で認められない部分は認められないとして自説を述べる関係のあり方。
- 2 類似性を持つ二つの事象によって構成される並列関係を間接的に否定するもので、意味的には二つの事象を比べてその相違点を際立たせ、形態的には（前後の文脈を捨象すれば）前件と後件の入れ替えが可能である逆接。
- 3 原因→結果（根拠→判断）によって構成される因果関係を間接的に否定するもので、意味的にはある事態の結果として予想されるものと逆の結果を示し、形態的には（前後の文脈を捨象しても）前件と後件の入れ替えが可能であるとは限らない逆接。
- 4 調査資料については稿末の「用例出典」を参照のこと。小説と論文のアンソロジーを選んだのは、描写を中心とした文章と説明を中心とした文章のそれぞれにおいて、書き手に多様性を持たせることで、本稿の結論が少しでも一般性を持つようにするためである。ちなみに、調査資料の中に出現し分析した用例の総数は 340 例である。
- 5 譲歩の場合、自分の意見を譲るといっても、その譲り方には、自分の意見を部分的に否定する方法（自らの立場の否定的承認）と、自分と対立する意見を部分的に肯定する方法（相容れない立場の肯定的承認）との二種類がある。
- 6 対比は、対立的対比と名づけた、係助詞ハに見られる発想を軸とした対比と、共存対比と名づけた、係助詞モに見られる発想を軸とした対比とに分かれる。
- 7 譲歩を表す表現として、典型的には「確かに」「もちろん」「なるほど」といった注釈表現や、「わかる」「認める」といった動詞、「だろう」「かもしれない」といった文末表現があるが、このような形態は譲歩表現全般にあらわれるので、特に各項目で出てくる度毎に取り上げて論じることはしない。

用例出典

（何）大江健三郎編 日本ペンクラブ選（1983）『何とも知れない未来に』集英社文庫（原爆小説のアンソロジー。12名の作家の13作品を分析）

（世）『世界』主要論文選編集委員会編（1995）『『世界』主要論文選』岩波書店（『世界』掲載の論文のアンソロジー。うち16名の執筆者の論文を分析）

参考文献

- (1) 石黒圭（1996）「予測の読み 一連文論への一試論一」『表現研究』64
- (2) ——（1997）「予測の読み 一予測に働く要因の俯瞰一」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』42-3
- (3) 杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子（1997）「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」『日本語教育』92
- (4) 寺村秀夫（1987）「聞き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3